

「自らの存在の意味」を問い続ける元ハンセン病の詩人

先日の真夜中に放送された、元ハンセン病患者の詩人のドキュメンタリー：「海を渡る詩」を見た。

13歳の時に発病し家族と別れ瀬戸内海に浮かぶ小さい島に強制収容され、「(火葬場の)煙突からの煙にならなんだら この島は出れん」の言葉に少女は希望を打ち砕かれ、34歳で完治したにも拘わらず目と足の後遺症もあり、差別と偏見のために故郷に帰ることも出来ない哀しさ、また、園内で同病の方と結婚後も自殺未遂などの苦悩の中で、「自らの存在の意味」をちらしの余白に詩を書き続けてきたという。

77歳になった今も、リウマチの痛みで寝ての生活の中で詩を書き続けている。

番組では、出版された1000編の詩集に触れ、癒され涙し、また、生きる勇気を貰った今の若者の様子も挿入されていた。

そのいくつかの詩を紹介します。

これらの詩に接し、いじめを受け、虐待されている子ども達の孤独感、哀しみなどの心の痛みを重ねてしまうのは、あまりにも深読みし過ぎであろうか……。

痛み

世界の中の一人だったことと 世界の中で一人だったことのちがいは 地球の重さほどのちがいだった

投げ出したことと 投げ出されたことは 生と死ほどのちがいだった

捨てたことと 捨てられたことは 出会いと別れほどのちがいだった

創ったことと 創られたことは 人間と人形ほどのちがいだった

燃えることと 燃えないことは 夏と冬ほどのちがいだった

見つめている 誰にも見つめられない太陽

がらんどうを背景に 私は一本の燃えることのない木を燃やそうとしている

アリバイ

深い目で 今日生きていたのかと問われると どうも生きてはいなかったようです

では 死んでいたのかと問われると どうも死んでもいなかったようです

信頼する神様 どうか生きていたのだという証明書を 一枚だけ私に下さい

追伸：詩人の HP サイトは、<http://www.kyodo-eiga.co.jp/tokazuko2.html> ですので、参照ください。

(2006年10月31日 記)